

石橋忍月研究ノート

## 『惟任日向守』論（上）

嘉 部 嘉 隆

一

現今の近代文学史においては、石橋忍月は評論家として評価されているが、小説家としては全く問題にされていない。しかし、明治期における忍月は、必ずしも評論家としてだけで評価されていたとは言い切れないようである。<sup>(注2)</sup>そしてまた、評価は別としても、小説家としてその作品がよく読まれたということは否定できない。<sup>(注3)</sup>むしろ、小説がよく読まれたということが、その小説がすぐれたものであったという証拠になるとは限らない。むしろ逆に作品が通俗的であったときえ言えなくもないであろう。ただ、本来忍月は文芸評論家として出発し、評論家として高く評価され、すぐれた業績を残しているが、評論家としての活動がほぼ明治二十四年に終っているのに対し、明治二十一年三月に『<sup>(注4)</sup>憂捨小舟』を発表して以来、明治三十五年に『花盗人』を出すまで、特に明治二十年代に小説家として、かなりの量の小説を発表しているのである。従って二十年代

前半の忍月が、評論の質の高さゆえに評論家として評価されるとすれば、二十年代後半の忍月は、小説の量の多さゆえに小説家として認識すべきではないかと考えられる。とはいえ、忍月の小説は評論と比して必ずしも質の高いものと見られず、殆ど論じられていない有様である。しかし、評論家としての忍月を取り上げる場合でも、評論家としての理論が小説という実作にどのように反映しているか、あるいは小説を通じて読み取れる文学観と、理論とがどのようにくいちがっているかを見ることによって、逆に評論家としての忍月を再認識し、または評価をあらためる必要が出て来るかもしれない。評論を捨てても小説を捨てなかった忍月には、小説に対するそれだけの愛着があったのであろう。このような点からも、忍月を論じる場合、小説を取り上げる必要が認められる。むしろ小説作品すべてを取り上げなければならないが、ここでは忍月の作品として、最近、最もすぐれていると評価されるようになった『惟任日向守』を最初に取り上げてみたい。まず最初にこの作品を論の対象と

したのは、忍月の思想、方法等について比較的把握しやすい利点があるためである。

## 二

『惟任日向守』は、藤田福夫氏によれば明治二十七年十一月末より十二月十一日まで、十四回にわけて「北国新聞」に連載されたものである。<sup>(注5)</sup>この作品は、明治二十八年十二月になって、春陽堂から単行本として刊行されている。

それでは従来この『惟任日向守』はどのように評価されているであらうか。

藤田福夫氏によれば、「『北国新聞』掲載作中最もすぐれた作」であり、また「忍月の小説中の代表作であらう」という。<sup>(注6)</sup>そしてこの作に対する批評記事が北国新聞紙上を賑わしたとのことである。<sup>(注7)</sup>

しかしながら、『惟任日向守』は単行本として刊行された後、全く黙殺されてしまったと言っているようである。斎藤昌三編の『現代日本文学大年表』や『明治文学書目』には名前をとどめているが、岩上順一の『歴史文学論』附録の「現代歴史文学年表」には記載がなく、吉田精一氏の編集による『現代日本文学年表』<sup>(注8)</sup>にさえ脱落しているのである。この作品が再び問題にされたのは、前記藤田氏の論であった。そうして『日本現代文学全集』<sup>(注9)</sup>第八巻中にこの作品が複製され、その解説で稲垣達郎氏は「忍月小説をできるだけ多く読みかえてみて、第一等の作品であることをあらためて確認し

た。(中略)忍月小説として傑作であるばかりではなく、明治歴史小説の名作に伍して必ずしも遜色のないものといえよう。」と評価しているのである。現在、これほどにまで評価され得る作品が、単行本刊行当時から問題にもされず、以後無視されて来たのであろうか。これにはそれなりの理由が考えられなくもない。そういう評価の問題をも含めて、ここでは作品そのものを分析し、忍月の用いた藍本を探り、藍本との比較の上で忍月の方法を説明してみよう。

## 三

『惟任日向守』は十四の章にわかれており、さらに「補拾」がついている。<sup>(注10)</sup>しかし、詳細に検討してみると、必ずしも各章ごとに独立した章に分けなければならないとは限らないようである。むしろ、新聞に連載されたため、一回の分量が限定されたと見る方が妥当であらう。<sup>(注11)</sup>

作品はまず武田勝頼の滅亡から筆を起し、勝頼の首級に対する織田信長の態度を批判的に見ている惟任日向守を描く。各章ごとに内容を要約すれば次のようになる。

- ① 第一 勝頼の滅亡
- ② 勝頼の首級に対する信長の非礼な態度
- ③ ②に対する光秀の感想
- ④ 第二 ③が光秀の態度としてあらわされた際の明智左馬助の諫言

⑤ 信長に疎んじられる感を反芻する光秀

- ⑥ 浪人時代の回想
- ⑦ 真田昌幸に対する信長の態度を批判する光秀
- ⑧ 甲信の合戦に於ける論功行賞
- ⑨ 降將木曾義昌、光秀に対し信長の態度を非難
- ⑩ ⑨に対する光秀の弁明
- ⑪ 武田家に於ける首実検の作法の例
- ⑫ 恵林寺焼打を命ずる信長への光秀の諫言
- ⑬ ⑫に対する信長の折檻
- ⑭ 第六 恵林寺焼打
- ⑮ ⑭に対する光秀の感懐
- ⑯ 第七 家康上京に際して、饗応司に光秀が任命される
- ⑰ 饗応が華美に過ぎると光秀が信長に折檻される
- ⑱ 光秀の家臣たちの憤激
- ⑲ 第八 斎藤利三が光秀の家臣になった経緯と信長に折檻を受けながら、利三を手離さなかった光秀（ここはほぼ斎藤利三の独白のような記述になっている）
- ⑳ 第九 斎藤利三、具体例で信長が光秀を滅ぼそうとしていると説き、暗に叛逆をすすめる
- ㉑ 備中国後詰の命令書到着
- ㉒ 第十 ②①において光秀の地位軽視のための家臣たちの不満
- ㉓ 国換の命令とそれに対する光秀および家臣たちの不満
- ㉔ 信長に対する光秀の憤激
- ㉕ 第十二 浪人中の回想により信長への憤懣の反省

- ㉖ 信長に対する反逆についての光秀の理論づけ
- ㉗ 第十三 反逆の決意をかためた光秀の感懐
- ㉘ 城中にて作った光秀の短歌と愛宕山における光秀の連歌
- ㉙ 本能寺襲撃に出発
- ㊀ 第十四 光秀の目的成就
- ㊁ 光秀の辞世
- ㊂ 補拾 顕如上人が本能寺の変のため、織田方の襲撃より救われる
- ㊃ 光秀の家臣達、秀吉を尼崎で待ちうけて襲撃したが、秀吉に逃げられる
- ㊄ 天王山の争奪戦
- ㊅ 洞ヶ峠の筒井勢に対する光秀の用心ぶりと明智勢の山崎の合戦における奮戦
- ㊆ 明智勢敗戦後の明智一族や家臣達の見事なふるまい
- ㊇ ㊆に対比して、信長・秀吉等の一族の危機に対しての醜態ぶり
- 右の要約の上の丸でかこんだ算用数字は、筆者が便宜上加えたもの。その下の漢数字はもとの章につけられているものである。これだけの要約ではやや簡に過ぎると思われるので、適宜必要に応じて説明を加えたい。
- 忍月が『惟任日向守』で企てたのは、光秀の反逆の理由の謎解きと光秀に対する再評価であったように見える。藤田氏は「明智光秀の人間味とその主、信長の残酷な性格を対照させ、個人の自主性を

重んじて圧迫干渉に対する抵抗としての光秀の反逆を正当視し」  
 「暢達の筆致で意気軒昂たる光秀の風貌を描いている。法律家的正  
 当防衛観と人間尊重精神を骨格にしてやゝ観念的な点はあるが、忍  
 月の小説中の代表作であろう」と言い、稲垣氏は「主をなみする逆  
 賊としかみられていない光秀を、新しく照明してみごとである」と  
 言う。確かに重要な指摘であり、忍月の意図をよくとらえていると  
 言えるが、このように断定するには、もう少し忍月の方法を解明し  
 てみる必要があろう。『惟任日向守』がどの程度まで忍月の創作に  
 かかるのか、あるいはどのような資料を使って歴史的な事実を記述  
 しているのかなどを調査した上で、はじめて忍月の作品として『惟  
 任日向守』という作品を論ずることが可能だと言えよう。

## 四

『惟任日向守』の藍本としては、かつて拙稿で指摘したように  
 『絵本太閤記』が考えられる。前記の要約三十七段のうち、全面的  
 に『絵本太閤記』(以後『絵本』と略記することがある)に拠った  
 と見られる段は次のとおりである。

⑤⑥⑦⑧⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘  
 また、部分的に『絵本』を原拠としているもの(単なる人名の列挙  
 や数字等を含む)としては次の各段が指摘できる。

①③④⑫⑭⑲

以上、合計二十八段が『絵本』を何らかの形でとり入れており、  
 『絵本』に全く関係がないと思われる段はわずかに九段にすぎないの

である。そして『絵本』の文章と『惟任日向守』の文章を対比して  
 みると、『惟任日向守』が『絵本太閤記』を殆どひきうつしにして  
 いる箇所さえ少なくないのである。念のため、各段が『絵本』のど  
 の部分に拠っているかを表にまとめてみる。

①	三篇卷之四	武田勝頼父子死天目山
③	右に同じ	
⑤	三篇卷之七	惟任光秀三恨信長公
⑥	初篇卷之九	明智光秀素性
⑦	三篇卷之四	武田勝頼父子死天目山
⑧	三篇卷之五	光秀強諫信長公
⑫	右に同じ	
⑬	右に同じ	
⑭	右に同じ	
⑯	三篇卷之七	惟任光秀再恨信長公
⑰	右に同じ	
⑱	三篇卷之七	惟任光秀恨信長公
⑲	三篇卷之七	惟任光秀再恨信長公
⑳	三篇卷之七	惟任光秀三恨信長公
㉑	三篇卷之七	惟任光秀三恨信長公
㉒	右に同じ	
㉓	右に同じ	
㉔	右に同じ	
㉕	三篇卷之八	照子断髮沽酒
㉖	三篇卷之七	惟任光秀三恨信長公



92	三篇卷之八	光秀於愛宕山連歌
93	三篇卷之十一	宇野豊後守最後並光秀陣押
94	四篇卷之五	日記之下
95	三篇卷之十一	光秀落命於小栗栖野
96	四篇卷之十一	日記之下
97	四篇卷之一	秀吉尼ヶ崎危難
98	四篇卷之四	加藤清正討四王天
99	三篇卷之十一	秀吉光秀争天王山
100	四篇卷之四	日記之下
101	四篇卷之五	筒井順慶裏切光秀陣
102	四篇卷之七	左馬介馬而涉湖水
103	四篇卷之一	明智左馬介生害
104	四篇卷之四	斎藤内蔵介被誅
105	四篇卷之四	加藤清正討四王天
106	三篇卷之十二	筒井順慶裏切光秀陣
107	三篇卷之十二	惟任方勇士討死
108	三篇卷之十二	六月二日後之日記
109	三篇卷之十二	淀君行狀

確實に對比できるのは以上であるが、なお若干の見落しがあるかもしれない。この単純な対比からでも忍月がいかに多くを『絵本』から得ているかがわかるであろう。『絵本太閤記』の説話の大部分は『真書太閤記』にとり入れられているので、『惟任日向守』は

『真書太閤記』を藍本としているのではないかという考えもできないが、この点に關しては、この三書の対応する部分の文章（あるいは対応する数字や列挙された名前などでもよい）を比較してみれば、『惟任日向守』は『絵本』に拠っていることは一目瞭然である。一例をあげれば、⑭では

信長の命を蒙りたる軍兵二百余人、恵林寺の周囲を取囲み風上に枯草を積みて火を放ちければ、無慈悲なる風は猛悪なる火の手を助け、見る間に山門の本堂金堂方丈鐘樓に火移り住持快川大通智勝国師を始めとし、諸寺の長老六人、单寮十二人、平僧尼小僧四十三人、悉く焼殺されしぞ実に哀れの極みなる。となつてゐるが、この部分に相当する『絵本』の文章は、

（略）信長公先の四人に仰附けられ、軍兵二百余人彼恵林寺に押寄せ、風上より焼草を積み、火を放て焼立れば、折節風の手強して、山門、本堂、金堂、方丈、鐘樓に火移り、住持快川大通智勝国師を始めとし、諸寺の長老六人、单寮十二人、平僧、尼、小僧四十三人悉く焼殺され、黒煙炎々と只一時の灰燼と成りけるは、哀なりし事共なり。

と、まず『惟任日向守』が『絵本』をそのままとり入れていることは否定できないであろう。これに対し、『真書太閤記』の該当部分は、

信長公は四人の奉行を召出しすみやかに恵林寺を焼払ふべしと下知し玉へば津田長谷川関赤座かしこまりて再度恵林寺へおしよせみれば快川和尚はじめ僧徒悉く山門の樓に居たりしかは

其下へ焼草を山の如く積上火をかけし程にはしの間に黒煙天を焦し猛火簷をはしるほとに数十人の僧徒の叫喚の声ものかなしくぞきこえける（中略）徒弟兄同宿煙にむせば焦れ死せしあまりのさまみるに忍びずいづれもさしたる遺恨にあらねばそゝろに涙を流しけり

となっており、数字の欠落もあり、文章もあきらかに『絵本』とはちがっているのである。

もつとも『絵本』に出ていないが、『真書太閤記』には記述されている説話が、若干『惟任日向守』にとり入れられていることもあり、必ずしも忍月が『真書太閤記』（以下『真書』と略記することがある）を参照しなかったとか、利用しなかったとは言えないようである。たとえば、④における明智左馬助のことばとして、

君曾て叡山の焼打を諫め玉ひしより以来、左なきだに猜忌深き  
右府公、一入君を憎ませ玉ふ折柄なるに

と言わせているが、この叡山の焼打に対する光秀の諫言は、『絵本』では全く描かれておらず、『真書』に

是より坂へおし寄せ延暦寺を焼払ひ三千のゑせ法師等を切尽  
しなんものをと申させたまふにより佐久門右衛門尉信盛明智十  
兵衛光秀大に驚きこはけしからずの御説ぞや（中略）光秀猶も  
詞を尽し諫を納るれども信長一向用ひたまはず

とあり、また⑥において

砲術は善く下げたる針に的中するの妙あり。

と書かれている光秀の特技が『絵本』には見当らない。しかるに、

『真書』には、

近年鉄砲流行するを以て光秀これを学び（中略）下針もはづさぬ手練となりたり

とあって、以上の二例からだけでは断定はできないが、『真書』も利用されているのではないかと思われる。(もっとも、(注19)『真書』が

藍本とした、もとの本であると考えられなくもない。第二例は「下

げたる針」「下針」とよく似ているが、これだけでは決め手にはならないであろう。) このほか、『絵本』にも『真書』にもない説話

も、『惟任日向守』にはいくつか見られる。たとえば⑨⑩⑪など、必ずしも忍月の創出した説話とも断定できず、むしろ何か藍本があ

とも考えられるのであるが、現在のところ、まだ確認するに至っていない。

以上のように『絵本』以外の藍本も考えられるが、やはり中心となっているのは『絵本』であり、⑭の例以外でも、『絵本』の文章をそのままかなり長く利用している例を調べてみると、

⑤  
⑥  
⑦  
⑧  
⑫  
⑬  
⑯  
⑰  
⑲  
⑳  
㉑  
㉒  
㉓  
㉕  
㉙

の各段があり、文章の酷似した例として引用するには、あまりに量が多すぎるほどなのである。

しかも、これだけ多くの『絵本』の文章を利用しながら、『惟任日向守』においては、異質の二種の文体が組み合わされているという異和感は少ない。忍月は『絵本』の文体を彼の文体の中に消化していると言えうである。このことは、逆に言えば忍月のこの作品における文体が、『絵本』の文体の影響をかなり受けているのでは

ないかという見方もなり立つ。とすれば、藤田氏の言う「暢達の筆致」が、忍月独自のものか、あるいは『絵本』の影響によるものかということが問題になる。この点については、後に詳しく検討したい。

『惟任日向守』を三十七の段落に区切って、そのうち二十八段が『絵本太閤記』を原拠としていることは、たとえ忍月が『絵本』をどのように切り抜き、独自の意図を以て配列を変え、『絵本』の思想を逆用したとしても、『惟任日向守』が『絵本』によって規制されているということになるかもしれない。

『絵本』に拠っている部分は、はっきりした特色が見られる。それは、いわば「事実」<sup>(注21)</sup>に相当する部分が『絵本』を原拠としているということである。登場人物の心理を描く場合は、『絵本』に拠っていることは少ない。しかし、『絵本』(または他の藍本?)の「事実」をもととして、登場人物の心理が引き出されているのである。従って藍本に何を利用したかということが、重要な意味を持つたということは、『惟任日向守』を論じる場合、大きな問題となるのであるが、この点についても後に論じたい。<sup>(注22)</sup>

『惟任日向守』で、『絵本』を原拠としていないと推定できるのは、

②④⑨⑩⑪⑬⑮⑯⑳㉑

の九段である。このうち、⑬⑯⑳㉑は光秀の心理なり思考なりを描いており、②④⑨⑩⑪の各段にも光秀の心理が描かれている。また、

②④⑨⑩⑪および㉑の後半は、何らかの原拠があってもいい「事実」が書かれており、全く原拠が不要で、忍月が創出したと考えて差支えないのは⑬⑮⑯と㉑の前半である。もし、②④⑨⑩⑪が忍月の創作であったと仮定しても、『絵本』が忍月の光秀観の基本になっていることは動かし難いといえよう。

それでは『絵本』における光秀像と、忍月の描いた光秀像とはどのように異なるのだろうか。

『絵本』が描こうとしたのは、豊臣秀吉の伝記的物語である。

『絵本』は小瀬甫庵の『太閤記』の大筋を受け継いでいるが、甫庵本でもすでにかなりの虚構が用いられている上、<sup>(注23)</sup>『絵本』では創作された説話が大幅に増補されているのである。主人公はひろく豊臣秀吉であるが、秀吉の行動をめぐってその周辺の武将達が描かれており、明智光秀もその一人としてかなりくわしく描かれている。とくに『絵本』では秀吉の好敵手として、秀吉をよりすぐれた名將として描くため、光秀もまた名將として描かれている。しかし、『絵本』では秀吉が中心に描かれているため、光秀の出で来る部分はかなり分断され、光秀の人物像が集中的に打ち出されていない。

これに対して、忍月の『惟任日向守』では、秀吉はいわば明智光秀のわき役として、その名前はほんの数箇所に出て来るだけであり、しかも、極めて矮小化されている。<sup>(注24)</sup>前掲の表でもわかるように、光秀の描き方は必ずしも『絵本』の順序によつてはいない。しかし、一応妥当な構成になっていると言ひ得よう。まず、信長の勝頼の首級に対する非礼について慨嘆し、信長より疎んじられるのを

感じながら、甲信の合戦に恩賞がない事実を示す。つぎに恵林寺焼打を諫言したため信長の叱責を受け、さらに家康饗応が華美に過ぎるというので、打擲されて饗応司を免ぜられる。その上、斎藤内蔵介利三を稲葉伊予守に譲らないということでもたも叱責される。最後に領地丹波近江の二国を召上げられ、そのかわりにまだ敵地である出雲石見を与えられるという無理を強いられ、信長に抵抗せざるを得ない光秀を、できるだけ心理的に必然性を賦与して描こうとしている。

もっとも、こういう構想は必ずしも忍月が創出したのではない。心理描写は別として、光秀が信長から恥辱を受けるという筋書は、すでに『絵本』に描かれているところである。光秀の信長に対する「反逆は從來謎であつて、そのために種々の解釈がこころみられている。」<sup>(註26)</sup>『絵本』はこのうちの怨恨説を基本にして説話を展開しているわけである。従つて忍月の考え方も結局は怨恨説に出ていると言つて差支えあるまい。藤田氏は「法律家的正当防衛観」ととらえ、稲垣氏は「主をなみする逆賊としかみられていない光秀を、新しく照明して」というが、藍本とつき合わせた場合、必ずしも新しいとは言えないのである。たとえば、『絵本』三篇巻之七「惟任光秀三恨信長公」に、

斯る難題を仰懸けらるゝ上は、当家の滅亡時節到来、是非に及ばざる次第なり。当月下旬、信長、信忠上洛あるべきと聞くなれば、その時は報を思ひしらせ参らずべし

とあり、「当家の滅亡時節到来、是非に及ばない心境は、忍月の

書いている、

茲に今の世の所謂正当防衛の理を臆気に胸に浮べつゝある光秀と隔たりはないのではなからうか。『真書』でも、

光秀が清和院源氏にしてしかも勇敢なるを忌て自死せしめんことを慮りてしばしば辱しめしかども光秀もまた軽々しく死せずよりて西国に下し陣没せしめんとして却てその手に害せらる

というように、ここでもいけば正当防衛説をとっていると言い得よう。つまり忍月は、光秀の行動を「正当防衛」という法律家的な生硬な用語をもつて規定したに過ぎないのであつて、ことばそのものは新しいと言えても、発想そのものが新しいとは言えない。ただ、正当防衛という考え方を導き出す過程は必ずしも『絵本』などの藍本によりかかつてばかりいるとも言えず、こういう面では忍月の作品としての独自性が言えるかもしれない。

既述のように『絵本』においても、光秀は名将として描かれている。『惟任日向守』においてもむろん極めてすぐれた武将として描かれている。共通しているのは、戦略・砲術にすぐれており、仏教に対する信心が厚く、貴族的な教養を身につけた、いわば文武両道に達した武将として描かれているという点である。そしてまた、信長の加える恥辱に耐えしのぶことができ、しかも部下に対して思いやりの深い名将として、多少描写に深淺はあつても両書は同じように光秀をとらえているのである。この共通点は、『惟任日向守』における光秀の行動が『絵本』の説話に拠っているかぎり、当然と言えよう。従つて忍月が『絵本』でどのような説話を捨て、他のどの

ような説話をとり入れ、あるいは創作したか、また『絵本』における光秀の行動の解釈を、忍月がどのように独自の解釈にあらためたかが、忍月の独自性を見出す手がかりになるであろう。

『絵本』を原拠としていない九段落のうち、光秀の造型に直接関係のあるのは、④⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯の七段である。このうち④は直接には『絵本』と関係はないように思われるが、

左るにても今日の合戦、滝川左近を始め河尻肥前、森勝蔵、津川玄蕃、毛利河内等皆な夫々寄手攻手の命を蒙りしに

という部分は、毛利河内を除いたならば『絵本』三篇巻之四「武田勝頼父子死天目山」に同じような人名が出て来る。(もつとも『絵本』の方は人名がもっと多い) また毛利河内守を入れて、津川玄蕃を除けば三篇巻之五「光秀強諫信長公」に同じような人名が出て来る(この場合も『絵本』の方が人名が多い)のである。しかも

例の狛童(蘭丸)何事をか言上し、疑ひ深き右府公にますく疑ひを……。

というような森蘭丸を讒言者として設定するという発想は、文章とそ違うが、『絵本』にも見られる。しかしこの段の眼目は、家臣である明智左馬助の諫言を通じて光秀の造型をなしていることであり、このように家臣を通じて光秀を描くという方法は⑦⑨⑫⑮などに用いられている。これは『絵本』では明智光秀に関しては見られない方法である。(もつとも、信長や秀吉の造型には自ずからこういう方法が必要でもあり、且つまた用いられている。しかし、忍月の方法の方がより効果をあげているとは言える)

⑨⑩⑪は、木曾義昌という武将を持ち出すことによって、②③を具体例を示して強調しているという構成になっており、方法として特に独自性は見られない。

⑮においては、

我曾て我君に対し、君寵余り厚からざる佐久間信盛と共に、叡山の焼討を諫めしことあるに(下略)

とある部分が『真書』の前に引用した部分と「佐久間信盛と共に」ということが共通している。この段落は、忍月の創作したところと思われるが、光秀の造型とともに、忍月の光秀観の上でも重要な問題を含んでいる。ここで恵林寺の焼打に対する

ア、われ光秀何の不幸ぞ、生れて既に二度三度、かゝる惨状を忍んで坐視せねばならぬとは、(下略)

という感想は、必ずしも『絵本』や『真書』と隔たりがあるとは言えない。しかし、諸将の前で信長を怒らすことになるかわかりながら強諫をあえてなすのは、一片の人情があるからだとし、

ア、戦国の世に生れたる我、不幸にして仁義の一端を嘗めたるこそ憾みなれ。(中略)我が人物の乱世に不似合にして羽柴等の如く世を滑るに巧みならぬこそ憾みなれ。(下略)

思へば今の世、人に権なく、天に父なく、数多の六尺男児「我」を無し意識を無し(中略)必竟是れ漢土道德の迷雲四海を覆ひ、偏小狹隘なる忠孝論我が日の本を暗くするに依る。我が眼光は不幸にも右府公よりも多くを見遠く見たり。(中略)織田家の宿将なる者は(中略)主君には無意識に従ひ(中略)



我は無意識に使はるゝ能はず。(下略)

というように、教養があり、才能があり、そのために「我」を押えきれない性格を描き、それを「不幸」ととらえているところは、『絵本』より一步進んだ心理分析となつてゐる。

もっとも、ここに持ちこまれてゐる儒教道徳は、江戸時代的なものであり、主として甫庵本『太閤記』以後の思想である。従つて、「仁義の一端を嘗めたるこそ憾みなれ」などという書き方は、結局はそれを否定して行く光秀を描いてゐるにしても、やはり『絵本』等の規制を受けていると言ひ得よう。

②においては、信長を

天下の敵、仏法の敵、宗旨の敵、人情の敵、道徳の敵、善美の敵、保存の敵

と言ひ、信長に対する反逆を単に正当防衛だけでなく、他の面からも正当化しようとしているが、この点は必ずしも忍月独自の解釈ではなく、やはり『絵本』以下の影響が見られる。

③においては、「將軍とならんとする欲望はなきにしもあらず」としながらも、

我其無智無謀を知り、又逆臣の汚名を蒙るべきを知り乍ら、且つ事を挙げんとす。実に已を得ざればなり(下略)

と書いているのも、結局既成觀念の敷衍に過ぎないと言えよう。

以上のように見てくれば、光秀の造型としていわば「新しい照明」を当てた部分としては④が中心となつてゐると考えられる。そしてこの部分を補強しているのが、『絵本』を藍本としながら、光

秀の心理に新しい解釈を与えている②⑤である。②では、

ソモ人と生れたる以上は何人にも平等に権あり格あり。人の権と人の格を度外に置いて忠孝の道を定む。是れ天下を腐敗せしめ人間を牛馬となすもの、天下寧ろ斯の如き誤りたる道徳あらんや。

と、今度は光秀に明治時代の思想を展開させてゐる。また、⑤においては『絵本』で、光秀の浪人時代を述べ「光秀斯る乏しき昔日を思はゞ、今の叛逆は企てまじきに」と書かれてゐるところを忍月は、

われ当年の乏しきを思はゞ、縦令信長公より如何なる耻辱を受くるとも恨み奉るべき訳にあらず。

去れど右府公と此光秀とは到底此世に兩立し難し。兩立し難きのみならず右府公は我を殺さでは已まざる御所存。吾思ふに一人には一人の意識あるが如くに、亦た一人の権ありと。

と変えて、ここから正当防衛の理論を導き出しているのである。結局、正当防衛ということばを使うために、「一人の権」などという明治的思想を持ち出す必要があり、これが忍月の明智光秀に対する新しい解釈だと思われるのであるが、しかしこういう明治の思想で明智光秀を解釈しなおすことが果して妥当と言ひ得るかどうか疑問は残るのである。

(未完)

## 注

1 長谷川泉氏の『近代日本文学評論史』には忍月の名は全く記されていないが、近代の評論史から忍月の名を抹殺するのは、忍月の業績を考えあわせると必ずしも妥当ではあるまい。

2 この点については拙稿「石橋忍月研究(一)」(大阪樟蔭女子大学論集」第六号 昭43・11)に、やや詳細に記しておいた。稲垣達郎氏によれば、『露子姫』のときは、明治二十二年十一月の初版から、明治二十八年十月の第七版まで確認できるところである。(講談社版『日本現代文学全集』第八卷「斎藤緑雨 石橋忍月 高山樗牛 内田魯庵集」作品解説)約六年間需要があったことになる。しかも実質的な活動期間を過ぎた明治二十四年以後にもなお需要があったことは注目すべきであろう。

3 もっとも、大和田建樹の『明治文学史』(明27・10)には、

(略)

露子姫

は世に出でたり。此書果して文学家一般を満足せしめしや否を知らずといへども。平凡なる一般社会には余り歓迎せられざりしと聞く。

と書かれている。七版まで重ねた作品に対してはやや否定的な見解とも言えよう。

『明治文学書目』によれば、単行本で十種類あり、単行本に収

録されなかった作品もかなりあるようである。

5 雑誌『文学・語学』第24号(昭37・6)「石橋忍月の金沢時代」

6 注5に同じ

7 注5に同じ

8 『現代日本文学大年表』(昭6・12)以前に刊行された『明治全小説戯曲大観』(高木文編大14・11)にも出ている。いずれも単行本の発行年月になっている。

9 筑摩書房『現代日本文学全集』別巻2(昭33・9)改訂増補版(昭40・6)

10 講談社発行 昭42・11

11 注5の藤田氏の論文によれば「補拾」は新聞連載時からすでにつけられているようである。

12 たとえば「第九」から「第十」にかけては、切り離れた方がかえって不自然であり、藍本では同じ章に収められている。

13 これはあくまで便宜的なものである。このように箇条書きにすると、前後のつながりの部分がはつきり出ない。

14 注5に同じ

15 『日本現代文学全集』第8巻「斎藤緑雨 石橋忍月 高山樗牛 内田魯庵集」中の「作品解説」

16 注2に同じ

17 『絵本太閤記』の引用文その他は「有朋堂文庫」(全三冊 塚本哲三校訂 大3)に拠った。

- 18 『真書太閤記』の引用文その他は「帝國文庫」新版（全三冊）中村孝也校訂 昭3・昭5 博文館発行）に拠った。
- 19 ただし『絵本太閤記』『真書太閤記』ともに底本のルビ及び返り点の類は引用文では省略した。
- 20 明智光秀に関する伝説は『明智軍記』が作り上げたものが多い。たとえば光秀の辞世などもこの書の創作と見られる。『絵本』『真書』とも、この書を利用して光秀を描いているようである。
- 21 文体の特色としては、藍本より忍月の作品の方が、感動詞の使用が著しく増加しており、会話の部分もふえていることなどが指摘できる。他の忍月の小説とも比較して、続稿で論じる予定。
- 22 ここで「事実」というのは、「史実」の意味ではなく、出来事・事件・説話等の意味である。「心理」に対することはとして使用した。
- 23 『絵本太閤記』の基本となっている儒教思想が、戦国時代の思想ではないところにも問題がある。
- 24 後半は『絵本』が藍本でないにしろ、広く知られた史実・伝説である。
- 25 甫庵『太閤記』については桑田忠親氏の『太閤記の研究』（昭和40・12 徳間書店）や、他の桑田氏の著書、あるいは松田修氏、荒木良雄氏などの論がある。拙稿「甫庵太閤記の研究」（『別府大学紀要』第十五輯 昭43・10）『太閤記』研究序説」（『別府大学国語国文学』第8号〔昭和42・3〕）は甫庵『太閤記』に関する限り、部分的ではあるが、最も詳しいと思う。
- 26 羽柴筑前守・羽柴秀吉・秀吉等の表記のほかに、猿・猿冠者などという呼び方を含めて秀吉の名前は四十回前後出て来るが、段落としては③⑤⑦⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗に限られている。「猿冠者」などという表現からも矮小化されていることが読みとれるであろう。
- 27 高柳光寿『明智光秀』（吉川弘文館「人物叢書1」昭33・9）にくわしい。
- 28 とはいえ、心理分析というほど掘り下げたものではない。要するに「事実」に対し、「心理」を、それかなり観念的に描写しているということである。
- 29 「人の権」とか「人の格」とかいうことは、間の「の」をとれば、まさに明治の思想であり明治のことばであろう。
- 30 追記 『惟任日向守』の本文の引用は講談社発行『日本現代文学全集』第8巻「斎藤緑雨 石橋忍月 高山樗牛 内田魯庵集」（昭和42・11）所収のものに拠った。ルビはすべて省略した。かなり誤植も見受けられる本文であるが、初版本を確認する余裕がなかった。ただし、引用の部分には誤植はないように思われる。